



utsumiya **Blitzen** **TIMES**

November.2025

Vol.97

Race Report

- | | |
|-------|-----------------------|
| 10.25 | Jプロツアー 群馬CSCロードレース |
| 11.09 | ツール・ド・おきなわ |
| 11.09 | ツール・ド・フランス さいたまクリテリウム |
| 10.26 | 東北シクロクロス わたりラウンド |
| 11.01 | グラベルワールドシリーズ「DUSTMAN」 |
| 11.09 | 幕張シクロクロス |

3分遅れでのスタート後は小さな逃げが発生するも決定的とはならず、フォンやアコスタが反応、岡は集団に留まり金子にマークされたままだった。6周目に5名の逃げ集団が形成され9周目に2名合流し7名となり、武山とフォンがその中に入り、集団との差は40秒前後を保ちながら続いたが、11周目からブリッツェンとウィクトワール広島が集団コントロールを始め逃げとの差を1分10秒程度に広げた。

ところがオープン参加の寺田吉騎(Bahrain victor nous development team)が18周目に単独で集団から飛び出し逃げ集団に迫ったが19周目に捕まり、逃げ集団は5名に減った。その後ベンジャミン・タイボール選手(ウィクトワール広島)が単独で飛び出し集団から37秒差をつけたが、金子と岡も追いつながら集団に戻り、阿見寺俊哉選手(アヴニールサイクリング山梨)と佐藤光選手(team Ciclos SNEI)の追走も加わったまま残り2周まで逃げと集団の差は縮まらず、逃げ切りの展開となかなかたものの、チームは勝機を狙って集団前方に固まり差を詰め、最終周の坂手前で岡、金子、山田拓海選手(シマノレーシング)がタイボールを捕らえスプリント勝負。岡が先頭でフィニッシュし、残り2周からのチームの献身的な動きが光る勝利を飾った。

岡はチームメイトへの感謝を述べ、鈴木貞雄監督は勝負のタイミングを評価、武山も仕掛けのタイミングに満足を示した。個人総合逆転は叶わなかったがチーム総合優勝を収め「ONE TEAMで戦った姿勢が形となった大会でシーズンを締め括り、岡は寒さと調子の不安を抱えつつも最終戦優勝で感謝の気持ちを表明した。

岡3時間45分35秒で優勝、2位に山田拓海、3位に金子宗平が入り、チームの他メンバーも中盤から後方に健闘したが菅野寛羅は途中棄権となり、これをもって2025年「プロツアー」は終了し、来季への期待と共に応援に感謝の意が示された。



群馬CSCロードで熱戦
総合優勝を確定させた

2025年10月25日に群馬サイクルスポーツセンターで開催されたJBCF Jプロツアー最終戦。岡篤志がチームの力を結集し、厳しい天候の中で劇的な勝利を収めた。この勝利でAstemo 宇都宮ブリッツェンはチーム総合優勝を確定し、岡は個人総合でも好成績を収めた。



10月25日 群馬CSCで開催された「プロツアー」最終戦には、既にチーム総合優勝を決めていた Astemo 宇都宮ブリッツェンが個人総合逆転を狙い岡島志を中心に挑み、谷順成、フォン・チュンカイ、ルーベン・アムスタ、武山晃輔、花田聖誠、菅野蒼羅の7名が出場。(沢田時はシクロクロスのレース出場のため欠場)

レースは6キロのサーキットを25周、計150キロで行われ、平坦区間は少なく残り2キロにある「心臓破りの坂」が勝負の決め手となり、霧雨と低温の悪天候下で過酷な競技となった。

個人総合ランキングは金子宗平、群馬グリーフィンレーシングが1971ポイントでトップ、岡は1633ポイントで338ポイント差があり、岡が優勝しても金子が6位以内なら逆転は困難で、7位以下に下がる必要があったが可能性は残っていた。

金子の今季3勝はいずれも逃げ切りで、直近の南魚沼ロードでは岡をマークし13位に入り、ランキング1位を固めていたため、この最終戦で独走を許さずマークを振り切ることが岡の絶対条件だった。

岡は群馬CSCについて「アップダウンとコーナーが続くテクニカルなコースで、スプリンターにもクライマーにもチャンスがある良いコース。金子選手に力負けたことも多かったが今回は自分に分があると思う、チーム力を活かしていい展開にしたい」と意気込みを語った。

残り周回でヨナス・ヴィンゲゴ（チーム・ウィスマ・リース・バイク）が落車するアクシデントもあったが、小野寺はチームメイトと共にチームのために走り続け、見事にゴールラインを越えた。レース後、小野寺は「長い間支えてくれたファンとチームに感謝してい

へ感謝とエールとして降り注いだ。

中盤の山岳ポイントやスプリントポイントでも積極的にアタックや牽制が続く中、小野寺は最後まで諦めず、自らの存在感を示しファンに最後の勇姿を届けた。さいたまスーパーアリーナ周辺では多くの観客が声援を送り、そのひととき大きな声援が「オノ・ライダー」への感謝とエールとして降り注いだ。



岡篤志、ツール・ド・おきなわ初優勝！

11月9日、沖縄で開催されたツール・ド・おきなわで、岡が初優勝を飾った。序盤から谷順成選手が逃げに乗るなどチーム二丸で戦い抜き、最終スプリントで見事に勝利を収めた。



ツール・ド・おきなわは、UCIポイント獲得がかかると重要なレース。沖縄北部を交通規制した200キロの過酷なコースを早朝6時45分にスタートし、普久川ダムの上岳ポイントで2回上るほか、東海岸の厳しいアップダウンも含むため真に力のある選手だけが競り合う舞台だった。

Astemo 宇都宮ブリッツェンは体調不良の選手を欠き、谷順成、岡篤志、ルーベン・アコスタ、武山晃輔の4名で挑み、谷は人数は少ないが4人全員調子が良く、チーム一丸となって逃げる誰かを寄せ、優位に進めて優勝を狙った。レース前に意気込んだ。前日に雨が降る予報だったがスタート時には晴れとなり、安心してレースを開始できた。

レースはスタート直後から激しいアタック合戦が繰り広げられ、40キロ地点で7名の逃げが決定し、その中に谷も含まれた。メイン集団はイタリアのスワットクラブがコントロールし逃げとのタイムギャップは約2分40秒を保ち、1回目の山岳ポイントを通過した。だが下り坂で逃げが2名と5名に分かれ、谷は後ろの5名へ。しかし徐々にペースを保ちつつ先頭2名との差を30秒に縮めてやがて再び7名に。

一方、136キロ付近の2回目山岳ポイントを通ると集団が逃げグループを捉え分裂が起き、トマルバ（キナンレーシングチーム）と山本大喜（チーム右京）が抜け出し、岡・アコスタ、谷は集団内に残った。スワットクラブの徹底コントロールにより残り25キロ付近で先行2名を捕まえた。

その後、勝負は先頭約30名に絞られ、逃げを狙う岡を含む選手がアタックを試みたが、全てスワットクラブが潰し残り13キロで6名の逃げを形成。岡・ジャコモ・ガラヴァリア（スワットクラブ）、ジョン・ウホ・ソウル・サイクリングチーム）、ベンジャミン・ダイボール（ヴィクトワール広島）、増田成幸（チーム右京）、新城雄大（キナンレーシングチーム）が抜け出したが、増田と新城が遅れ勝負は4名に絞られた。岡は谷の逃げのおかげ

で脚を温存でき、「この中で一番のスプリント力があるのは自分だ」と勝利への意気込みを見せた。



逃げの中心だったダイボールがラストスプリントを狙い先行するも失敗し、残り400メートルで4人は速度を落として牽制に入った。岡は残り1キロで3番手をキープし、先頭に上がった後方からのアタックだけを警戒しつつフィニッシュラインに近づき、満を持して最後の200メートルで力強いペダリングを見せ初優勝を飾った。岡は「7年ぶりのツール・ド・おきなわ出場で過去に結果を出せなかったが、今回の勝利は今後の自信になる」と喜びを語った。

2025年のロードレース公式戦はこの大会で締めくくられ、岡は「脚を温存しながら展開に恵まれた最高の形でオフィシーズンに入れる」と述べ、レースを支えた関係者やファンへも感謝を伝えた。

小野寺玲 最後の疾走 さいたまクリテリウム

11月9日、小野寺玲選手が現役最後のレース「ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム」に出場。ファンの声援を受け、全力で走り抜き、惜しまれつつ現役生活の幕を閉じた。

11月9日、さいたま新都心の特設コースで開催された「J:COM presents 2025 ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム」。このレースは Astemo 宇都宮ブリッツェンの小野寺玲選手にとって現役最後の試合となり、多くのファンの注目を集めた。

当日は雨が降った後のウェットな路面で、一筋縄ではないかないコンディション。しかし、引退レースとなる小野寺選手は気迫十分にスタートから攻めの姿勢を見せた。リアルスタート後の序盤からアタックを仕掛け、2周目には複数の日本人選手と共に逃げ集団を形成。安原大貴（メトリックス・パワー）らも加わり、一時はメイン集団から10秒以上のリードを取った。

12年間のプロキャリアを経て、難病と闘いながらも最後まで走り抜いた小野寺選手の姿は、多くの人の心に深く刻まれた。彼の熱き戦いはブリッツェン史に名を残し、後進の道しるべとなるだろう。

今後は選手としての活動を終えるが、彼の情熱と経験は自転車競技界で新たな形で生かされていくことが期待される。これまでの応援に心から感謝し、彼のこれからの人生に幸多かれと願いたい。

11月9日、千葉県美浜区の幕張海浜公園Gプロック特設コースにて「UCI」シリーズ第4戦幕張クロス2025が開催された。午前中から降り続いた雨の影響で、コースは泥深いマッドコンディション。シクロクロスらしい厳しいレースが展開された。



泥と闘い抜いた沢田時、惜しくも2位

11月9日、千葉・幕張海浜公園で開催されたUCI/UCXシリーズ第4戦。雨で泥深いコースを制したのは織田聖選手。沢田時は終盤にパンクし惜しくも2位となった。

選手たちの顔やバイクは泥だらけになるシクロクロスならではの厳しい状況が続いたこのレース。沢田は泥区間の走破率が高く、多くの場面で先行できたと語っている。泥区間を先頭で抜けられれば有利と判断し、積極的にアタックを仕掛けていた。周回を重ねるごとに、トップ争いは沢田と全日本チャンピオン織田聖選手（弱虫ヘタルサイクリングチーム）の2強対決に絞られていく。

ラスト1周、沢田は約10秒のリードを保ちながら最終周回へ。しかし、ここでタイヤがパンク。シケインで織田選手に先行され、粘りを見せながらも逆転を許してしまった。最終的に織田選手が優勝、沢田は2位でフィニッシュ。副島達海選手が3位となった。

レース後、沢田は「泥も乗っていて、先行する場面も多くすごくいいレースができた。ただ、ラスト1周でパンクして追いつかれてしまった。攻めた結果なので、それも実力。面白いレースではあったが、最後は悔しかった」とコメント。また、「次は地元滋賀でのUCIレース。優勝を目指してしっかりコンディションを整えたい。今年の目標は全日本選手権の優勝、今日は負けてしまったが、最後まで優勝争いができたことはプラスに捉えている」と語り、さらなる巻き返しを誓った。

沢田時、東北シクロクロスで堂々今季初優勝！

10月26日、東北シクロクロス開幕戦が宮城・鳥の海公園で開催。泥と急斜面が待ち受ける難コースで Astemo 宇都宮ブリッツェンの沢田時が初挑戦ながら圧巻の走りを披露、抜け出して独走勝利を飾った。熱戦の模様をレポート。

秋雨に濡れた宮城県亘理町の鳥の海公園で10月26日、UCI東北シクロクロスの開幕戦が開催された。1周3キロのコースには急な登りやぬかるみ、泥だらけの区間が点在し、選手の技術と持久力が試されるタフなレースとなった。

75名の出場者の中で、Astemo 宇都宮ブリッツェンの沢田時は、自身の技術と経験をフルに発揮しようと挑戦的な気持ちでレースに臨んだ。スタート直後から全日本チャンピオンの織田聖選手（弱虫ヘタルサイクリングチーム）と並び、激しいバトルを繰り広げた。泥と悪路に加え、上りの急斜面や深いぬかるみが続く区間ではランニングやバイクの乗り降りも多く、選手の駆け引きと判断力が重要だった。

最終盤、油断することなく慎重に走りつつも、アグレッシブな走りを維持。このコース特有の荒れた状況ならではの判断力が勝利を呼び込んだ。最終的に、沢田は笑顔でフィニッシュラインを駆け抜け、シクロクロス今季初挑戦にして見事な優勝を飾った。レースは、完走者わずか10名という過酷な条件下での戦いだった。

実は、沢田はレース前から積極的に準備を進めていた。SNS上では、自作のコースやシケインを設置し、十分な準備とトレーニングを積んでいたことを明かしている。約1か月前には、会場の練習にも頻繁に足を運び、コースの特性を把握してきた。早期からシクロクロスバイクに乗り込み、テクニクの向上にも努めていた。「泥や雨に負けない走りをイメージしてしっかり準備してきた。コース条件に応じて柔軟に対応できたのが勝因」と振り返る沢田選手。彼のコメントからも、勝利への強い意気込みと自信が伝わってくる。

今後は、国内外の複数のレースが控えており、12月の宇都宮シクロクロスや全日本選手権に向けて、さらなる仕上げを図る予定だ。「今シーズンのスタートとして最高の形、応援してくれるサポーターの皆さんの声援も大きな励みになった」と語る。彼の活躍から目が離せないシーズンになりそうだ。

沢田時がUCIグラベルワールドシリーズ制覇！

11月1日、Astemo 宇都宮ブリッツェンの沢田時選手がタイ・カンチャナブリ県で開催されたUCIグラベルワールドシリーズ「DUSTMAN」男子エリートクラス（距離130キロ）で、沢田が見事に優勝を飾りました。

このレースは熱帯雨林のシングルトラックやサトウキビ畑、高速区間、浅い河川の渡渉ポイント、さらにはローリングヒルが連続する多彩な地形で構成され、選手の技術と体力が試される難コースです。序盤は先頭5名のバックで展開しましたが、泥区間に突入すると、シクロクロスで培った高いテクニクで沢田が主導権を握りました。

その後ライバル選手を一人ずつ振り落とし、最後の対戦はデンマークのトビア・ス・モーク・コンスタッド選手との一騎打ちに。沢田は泥と下りのテクニカル区間で差を広げ、残り約40キロ地点で単独先頭に立ち、そのまま独走でフィニッシュラインを駆け抜けました。

レース終盤には茨にサングラスを失うアクシデントもありましたが、冷静に対





2025 シーズン エンドパーティー開催

Astemo 宇都宮ブリッツェン は 11月15日、宇都宮市内のホテルでシーズンエンドパーティーを開催。ファン約 150 人とともに 7 年ぶりの J プロツアー総合優勝を祝福し、活躍の 1 年を振り返りました。

11 月 15 日、栃木県宇都宮市のホテルニューイタヤでシーズンエンドパーティーが盛大に行われました。今年は J プロツアーで 7 年ぶり 4 度目となるチーム総合優勝という快挙を達成し、選手やスタッフ、ファンが一堂に会して喜びを分かち合いました。

パーティーには鈴木真理監督をはじめ谷順成主将、小野寺玲選手や岡篤志選手ら 10 名の選手が出席し、熱心なファン約 150 名との交流が行われました。歓談のほか、年間総合優勝の表彰式や退団選手のセレモニー、そして抽選会やビュッフェ形式の食事を用意され、和やかな雰囲気の中でシーズンの締めくくりを楽しみました。

谷主将は「高いレベルで戦うチームの主将を務めることができ誇りに思う。来季はより上の国際舞台を目指し、地域貢献も忘れず根ざした活動を続けたい」と抱負を語りました。今季は 3 月の真岡芳賀ロードレースでフォン・チュンカイ選手が勝利し、その後もほぼ全戦で表彰台を獲得、11 月には沖縄で岡選手が国際レース「ツール・ド・おきなわ」を制するなど躍進を続けました。

退団・引退する選手たちには花束が贈られ、ファンやチームスタッフから温かい拍手が送られました。会場には選手を称える Victory 缶バッジも配布され、参加者の笑顔があふれる特別なひとときとなりました。

Astemo 宇都宮ブリッツェンはこの勢いで 2026 年シーズンに挑み、新たな歴史を刻むことを誓います。応援してくださるすべての皆様に感謝を込めて、これからも一層の飛躍を目指します。

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。

Astemo



Thank you for your support.

Blitzen 7